ひと☆企業 ▶2023

サクラ設備（習志野市）

岩井 健 代表取締役

〝時代ニーズあった活動を〟

CPD研修をスタート

インフラ業の責務を全う

習志野市インフラ協議会は、地域インフラを支える建設事業者が集まり2017年5月に設立、昨年5月に一般社団法人化した。技術研修会やCPD研修（継続職能研修）などを通じた会員の技術力向上、将来の担い手確保を目的とした小学校向けの出前授業など、さまざまな事業に取り組んでいる。初代会長として「多くのアイデアを出し、時代と社会のニーズに応える活動に取り組みたい」と語るサクラ設備（習志野市）代表取締役の岩井健さん（56）に、安全安心なまちづくりにかける思いを聞いた。

同社のルーツは、日立製（現会長）が、東京・亀戸工場作所に勤めていた父の庄氏（現・亀戸中央公園）閉鎖時に南小岩で独立して開業した個人事業。72年には分工場のある習志野に移転し、質の高い工事と技術で、地域に根ざした建設会社に成長した。社名は〝桜〟からと思われることが多いが、庄氏の出身地〝佐倉市〟に由来する。「父は中学時代に長嶋茂雄さんと一緒に野球やっていたくらいだから、熱烈な巨人ファン。今も現役で、週3回は事務所に来て新聞を読み、事務員と話して帰る」

家業を継ぐ決心をしたのは高校生の時。いろんなことやってみたいと迷っているのを見かねた担任の先生が、進路相談で「家業を継ぐのが一番の親孝行」と背中を押してくれた。

代表就任後は、地域に密着した建設会社として公共工事から民間工事まで幅広く事業を展開。北上電設工業（宮城県石巻市）社製の強制対流システム「エコシルフィ」の総代理店としても業績を伸ばしている。

〝楽しく働く〟がモットー。建設工事の魅力は、「ゼロから物を作って完成させた時の達成感と、好き嫌いはあっても、いろんな人の力を借り、協力しながら仕事を進めていくこと」と語る。

「楽しくなかったら転職した方がいいよと言っているけど、辞める社員はほぼいない。転職を繰り返していた人が、弊社に来てそのまま定着してくれているのをみると、居心地はいいのかも」

代表に就いた翌年、代理店契約のため滞在していた石巻市で東日本大震災に遭遇、被災生活を送ったことは、その後の人生に大きな影響を与えた。「取り交わした契約書も流された。3日間も音信不通で、父はまた代表をやんなきゃいけないのかなって落ち込んでいたらしい。避難所では段ボールを敷いて寝て、食事は1日におむすび1個。そんな中でも、〝私はもう死ぬだけだから若い人が食べろ〟って言ってくれるおばあちゃんもいた」。当時のことを振り返ると今も目頭が熱くなる。

震災の怖さを知り、社会基盤を担う業界としての責任感を痛感。地域の安全・安心に貢献できるよう、習志野市ガス協力会の会長に就任するといきなり解散し、あらたに習志野市インフラ協議会を設立した。「新しい団体にしたいと言ったら、めちゃくちゃなことを言っていると思われたけど、時代のニーズにあわせて、技術向上など会員になったメリットが実感できる集まりにしたいと思っていた」

市指定工事店の資格らに必要な技術研修会を受けれるようにしたほか、今年からCPD研修（継続職能研修）をスタートさせた。「3、4単位もらうため都内まで行くと一日潰れてしまう。市内なら端から端まで行っても20分。市内で12単位取れるようにするから、午前中の3時間だけ時間をちょうだいとお願いしている」

コロナ禍で長く中止していた、トイレの仕組みを学ぶ小学校向け出前授業も再開、ことしは7月に津田沼小学校、9月に香澄小学校で実施する。ポンプメーカーのテラル（広島県福山市）も初めて参加、「ゆくゆくは水道の蛇口や冷暖房の仕組みなども伝えていきたい」と構想を膨らます。

興味をもった一握りの児童でいいから業界に就職してほしいと準備に余念がない。

「習志野市は、面積は狭いけど、みんなの顔が見え、地元企業に優先して仕事をやってもらって、何かあった時に助け合おうと、官民が隔てなく強い仲間意識で結ばれている」。地元への誇りを胸に、安全・安心な街づくりを担うインフラのプロとしての強い使命感が垣間見えた。

「習志野市は、面積は狭いけど、官民が隔てなく強い仲間意識で結ばれている」と語る岩井代表

プロフィル

いわい・けん　1967年東京生まれ、習志野育ち。建築系専門学校を卒業後、87年にサクラ設備に入社。2010年に代表取締役就任。17年、習志野市インフラ協議会の設立と同時に会長就任。趣味は車。光岡自動車のバイクカー「リューギ（流儀）」に続く現在の愛車はシトロエンC5

■サクラ設備　1966年に東京都南小岩でイワイ設備として営業を始め、69年に市本大久保、85年に同実籾町に本社を新築移転。従業員16人。2011年3月、強制対流システム「エコシルフィ」の総代理店登録